

# 公益財団法人日米医学医療交流財団 留学助成

## 研修報告書 (2024年度 助成者)

作成日 2024年8月29日

氏名 (フリガナ)	下川 瑞起 (シモカワ ミズキ)
研修先機関名	Hawaii Tokai International College
研修期間	2024年8月5日 (月) ~ 8月10日 (土)
大学名	群馬大学
学年	5年

私が本プログラムに応募した理由は、第一に医学英語を実践し今後の留学や自己研鑽に活かすこと、第二に普段関わることのできない全国の優秀な同期と交流することでした。いずれの目的も十二分に達成することができ、帰国時には充実感で胸がいっぱいでした。

プログラムの内容は、自大学では全く経験することのできない実践形式の医学英語でした。最初のワークは英語で行う PBL でした。医学の専門用語だけでなく、医学英語独特の言い回しなどに苦戦しましたが、メンバーどうしが知識を補い合って議論を交わし、1日の終わりには鑑別疾患を続々と列挙できるようになりました。リーダーシップの上手な学生や医学英語に詳しい学生もいて、同期の優秀さに感心し刺激を受けました。私個人としては、本プログラムに備えて、内科診断学に関する洋書を読み医学英単語を学習していたので、自分が日本で学習してきたことを実践の場で活かすことができ大変嬉しかったです。しかし、まだ自分の限界値ではないことも感じ、今後もより一層医学英語の学習をしていきたいと、強く思いました。

続くワークは医療面接でした。問診すべき項目を全員で確認したあと、実際にどのような言葉で問診をすれば良いか学生同士で試行錯誤しながら取り組みました。午前に日本人同士で考えたことを、午後の JABSOM の学生とのワークの中で実践し、その場でアドバイスをもらいながらより良い医療面接ができるようになりました。

翌日には、医療面接に加えて、プレゼンテーションにも挑戦しました。海外の医療機関に勤める上で、プレゼンテーションは自分の力量を示すための唯一の手段です。たとえ英語が苦手だとしても、そのプレゼンテーションが理論的であればどの国でも通用します。もちろん英語で症例のプレゼンテーションをすることは初めてでしたが、ご用意いただいたフォーマットを頼りに、先生方から何度もご指導の機会をいただき、最後には自信を持ってプレゼンテーションできるようになりました。

JABSOM の学生との交流も本プログラムにおいて最も印象的だったことの一つです。アメリカと日本とで医師になるまでの道のりは大きく異なりますが、医師を志す気持ちは共通であり、お互いの思いを共有することができました。自大学の狭い環境の中でひたむきに勉強して参りましたが、世界にも同じように勉強に励む同志の存在は、今後も私を励ましてくれることと思います。

本プログラムは私にとって大きな挑戦でしたが、この 1 週間英語で医療を実践できたことは大きな自信になり、今後の学習とキャリアの原動力となっています。正直に申し上げて、医学部に入学してからここまで達成感と充実感を感じたのは初めてでした。ただでさえ難しい医学を英語で扱えたという実績は、国際的な医療に関わることへのハードルを大きく下げてくださいました。私はまだ、自分の得意とする英語を医療の中でどのように活かしたいのかが明確ではありませんが、今回の挑戦で得たことを自信に変え、また今回出会った同期から受けた刺激をもとに、自分らしい輝き方を今後も模索し続けます。